ワンワールドフェスティバル2023

日本WHO協会ワンワールドフェスティバル2023分担担当者一同
秋吉麻由美　　山田　絵里
木下　英樹　　安田　直史
戸田登美子　　渡部　雄一
中村　安秀　　Gita Nirmala Sari

ワンワールドフェスティバルは「西日本最大級の国際協力のお祭り」と言われるように、国際協力、国際交流に関わるさまざまなアクター（政府、民間企業、NGO/NPO）が一同に会して交流し、情報交換や情報発信を行う場です。老若男女、素人玄人、一般の人も気軽に、国際協力に触れられる機会になっており、楽しみながら学んだりネットワークを作ったりできるのが魅力です。COVID-19によって2年間は「オンライン開催」となってしまいましたが、3年ぶりに以前と同じく大阪市西区民センター、関西テレビ関テレ広場、扇町公園、そして今年は山西福祉記念会館など近接する4か所を会場にして2023年2月4-5日（土日）に対面開催されました。いくつかのセミナーやイベントはオンラインでライブ、および録画配信されるというハイブリッド方式がとられていたのは、さすがポストコロナ時代です。詳しくはhttps://onefes.net/をご覧ください（図1）。録画の視聴も可能なはずです。

幸い両日ともとてもいい天気に恵まれ、朝早くから準備をする人や日本人、外国人のボランティアが忙しく動き回っていました。参加してみての感覚としてはCOVID前よりも参加者が若干少ないかなという程度で、ほぼ回復していたと思います。オンライン参加者を含めると増えているかもしれません。

熱気に包まれた屋内イベント

北市民会館の2階がフェスティバルのメイン会場で、各団体のブースがずらりと並び、朝からすごい熱気に包まれていました。全部で65団体のブースがあったようで、JICA、協力隊、内閣府などの政府系、ユニセフ協会、世界銀行、そしてWHO協会などの国連系、国境なき医師団、テラ・ルネッサンス、HumaなどのNGO系、和歌山大学やさらにサラヤ、日立造船、ゆうちょ財団などの民間企業の出展もみられました。（写真1）各国の民族衣装を試着して会場を回ったり、ゲームやクイズなどのエンターテインメントもありました。

展示以外にもセミナー、トークショーや国際協力キャリアセミナー（外務省、JICA、NGO、ほか）などが20以上、ステージでは歌、ダンス、民族音楽演奏、動画コンテストなどのエンタメ系が10以上行われました。

晴天の屋外イベント

好天に恵まれ、2月としてはとても暖かな日でよかったのは、隣接する扇町公園で繰り広げられた屋外イベントです。ここではUNHCR協会や国境なき医師

図1 ワンワールドフェスティバル2023公式ポスター

写真1 賑わう展示会場の様子

団がテントを建てて難民キャンプや野外病院の様子を再現し、体験できるようになっていました。こんな狭いテントの中での生活はやはり大変だろうなと、実際にこのテントで暮らさなければならない難民の方々の気持ちを思いました。野外病院は狭いながらも非常に効率的にできる様になっているのに感心しました。
その横にはキッチンカーが並び、国際イベントにちなんでインド、インドネシア、トルコ、韓国など国際的なメニューが楽しめる趣向になっており、楽しいお昼ご飯をいただきました。

さらに驚いたのは、公園にプロレスのリングが設営されて、なんと本物のプロレスの試合が行われていたことでした。覆面をしたレスラーの人たちが会場を見学されていたので、「この人たち何やろう？」と思っていたのですが、空き時間に見て回っていたようです。（写真 2、3）

クイズで盛り上がった WHO 協会展示ブース

日本 WHO 協会では展示ブースとセミナー「わたしたちの地球、わたしたちの健康：Our planet, Our health」の開催を行いました。

ブースでは WHO の紹介、日本 WHO 協会の紹介とその活動として関西グローバルヘルスの集い（KGH）、機関誌「目で見る WHO」、ラオス小児外科プロジェクトなどをポスターや資料で解説するという情報提供ものが多かったです。常時複数人の関係者（職員＋ボランティア）が待機して来訪者に説明していました（写真 4）。また昨年の世界保健デーで募集した動画コンテストの優秀作、過去の関西グローバルヘルスの集い（KGH）の録画や、ラオス小児外科プロジェクトで作成したビデオを流していたのは、単なるポスターだけではなく注意を惹く効果があったようです。さらに今回初めての試みとして「グローバルヘルスクイズ」を午前一回、午後一回行いました。これはブース付近に集まってくれた人々にさまざまなグローバルヘルスに関する問題を出し、最も正解が多かった人は記念品がもらえるという企画でした。事務局長や他のスタッフが「やや強引に」人集めしてくれ、またクイズも大声でダイナミックなやり取りが行われたために結構人が集まってくれて盛り上がっていました

❶ 快晴の屋外会場の様子。奥にプロレスリングが見えます（写真2）
❷ 昼食にワールドフードを楽しむボランティア（写真3）
❸ 日本WHO協会の展示ブース（写真4）

（写真 5）。高校からの課外学習で来ていたグループも参加して楽しみつつグローバルヘルスの知識をつけてくれたと思います。ご近所のブースからユニセフ協会やテラルネッサンスなどのスタッフも参加してくれました。面白い（？）ことに、４回行ったうちの３回では優勝者が外国人だったというのは何を意味するのでしょうか？日本人は世界の状況についての知識や認識が乏しいということなのでしょうか？巷でよく言われるように「日本人は内向きになっている」ということとも関係しているなら真剣に考えなければならない問題ではないでしょうか。若者に世界に目を向けてもらうためにもワンワールドフェスティバルの様な企画がなおさら大切です。グローバルヘルスクイズの一部を以下に出題しました。さて読者のみなさまは何問正解できたでしょうか？（図 2）正解は隣のページの最後にあります。

グローバルヘルスクイズ

Q1：WHO/UNICEFによると世界全体で、代表的な子どもの予防接種である三種混合ワクチン接種を1歳で３回済ませた子どもの割合はおよそ何％でしょうか？
(1) 20%
(2) 50%
(3) 80%

Q2：2022年の世界保健デーのテーマは何でしょう？
(1) Support nurses and midwives「看護師・保健師と助産師を支援しよう」
(2) Building a fairer, healthier world「より公平で健康的な世界を築くために」
(3) Our planet, our health「私たちの地球、私たちの健康」

Q3：2022年12月時点でCOVID19による死者数が最も多いのは、どのWHO地域でしょう？
(1) ヨーロッパ地域
(2) アメリカ地域
(3) 西太平洋地域
(4) 南東アジア地域
(5) 東地中海地域
(6) アフリカ地域

Q4：妊娠・授乳中はインフルエンザの予防接種を受けることができない。
(1) 正
(2) 誤

Q5：現在、WHOが国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態 (PHEIC)に指定しているのは、コロナ(Covid-19)、サル痘ともう一つはなんでしょうか？
(1)ポリオ
(2)エボラウイルス病
(3)インフルエンザ

図2 グローバルヘルスクイズの一例
（正解は隣のページの最後にあります）

食から考える プラネタリーヘルスとは？ —WHO 協会セミナー

WHO 協会セミナーでは 2022 年の世界保健デーのテーマである「わたしたちの地球、わたしたちの健康：Our planet, Our health」を取り上げ、関連した二つの講演を行いました。

最初の講演は当協会の**理事長　中村安秀さん**です。「プラネタリーヘルスの時代がやってくる！」と題し、昨年の世界保健デーでこのテーマが選ばれるようになった背景への考察と、日本 WHO 協会がプラネタリーヘルスに関するオンラインセミナー（KGH）をシリーズで行ってきたことを報告されました。なかでも「わたしたちは、自分にとって良いことが世界にとってもいいのだという前提で生きてきた。私たちはまちがっていた。生き方を変えなければならない、仮定を逆転させてみよう。世界にとって良いことは、私たちにとってもいいことなのだ。」という米国のウェンデル・ベリー氏の言葉を紹介されたのは印象的でした。日本にも他の国にも自然からの恵みを享受し、生活を守りながらもその恵みを次世代に伝えてきた知恵と伝統があることを紹介し、それらから学ぶ姿勢が大切であるというメッセージで結ばれました。

続いて**大阪大学大学院 人間科学研究科 専任講師　木村友美さん**から「食の選択とプラネタリーヘルス：インドネシア・パプア州の事例から」のご講演をいただきました。「人と地球の双方に良い『食選択』は可能か？」との問いのもと、パプア州の事例を紹介しながら不適切な食選択が個人の健康を害するリスクがあ

写真5 グローバルヘルスクイズに答える参加者

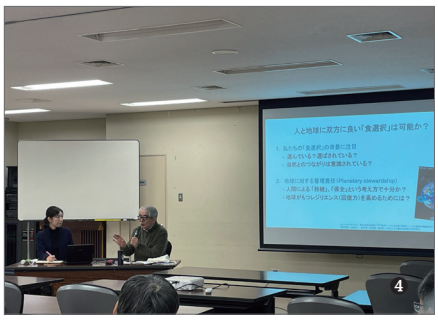
るとともに、環境負荷にもつながっていることを説明されました。特に「人が食べるために栽培されている植物は5000種類以上あるが、世界の食糧供給の4分の3は、たった12種の植物と5種の家畜動物でなりたっている。たった4つの作物(小麦、コメ、トウモロコシ、大豆)が地球の全農地の半分を占めている(Martin et al. 2019)という実態から、食料生産が自然環境に及ぼす影響は絶大であり、我々がそれを意識しての食選択を行うことが非常に重要であるのではないかという問いかけが行われました(写真6)。

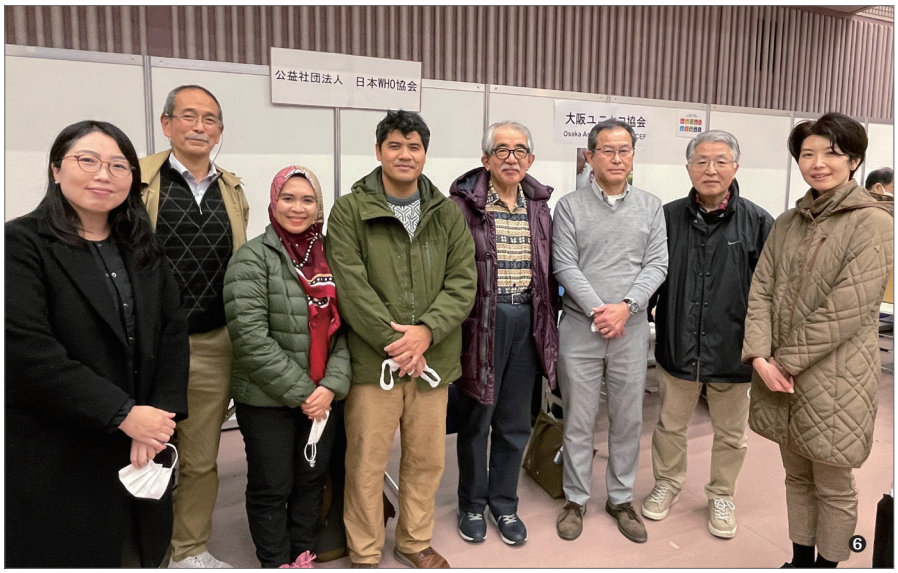
その後は会場参加者も含めて「身近な食のプラネタリーヘルスを考えてみよう!」というフリートークが行われ、短い時間でしたがいくつもの活発な質問や意見が寄せられて質の高い議論がなされました。(写真7)

来年のワンフェスを手伝ってみませんか!

出展する側としてはとても楽しい二日間でしたが、この種のイベントはもともと「国際」に関心を持つ人は来るが、本当に来てほしい「関心のない人」は結局来ないというジレンマがあります。その点高校生などが学校から参加するというのはとてもいい取り組みですし、週末だったので関テレスクエアに遊びに来た親子連れもフェスティバルの様子を覗いておられたのはとてもよかったと感じました。ワンワールドフェスティバルを真に効果あるものにするために、主催者はそのような戦略的広報・動員を真剣に検討してほしいと感じました。グローバルヘルスに限って言えば、COVID-19を経験した私たちの中にはもっとグローバルヘルスに関心を持つ人が多くなっているのではないかと期待していましたが、必ずしもそのような変化は感じませんでした。地球の健康、世界の健康が私たち自身の健康に強くつながっていることを実感した今こそ、もっともっと多くの人を巻き込んで、世界の保健問題に関心をもつ人を増やさなければならないと強く思いました。

来年も日本WHO協会はさらに強力な出展・企画を目指します。ブースやセミナーを手伝ってくれる人も大歓迎です。あなたも日本WHO協会の賛助会員になって、その活動に参加しませんか?(写真8)





❹「食の選択とプラネタリーヘルス」のご講演(写真6)
❺ 身近な食のプラネタリーヘルスについての会場とのフリートーク(写真7)
❻ チームWHO協会です!(写真8)

グローバルヘルスクイズの正解: Q1:(3) Q2:(3) Q3:(2) Q4:(2) Q5:(1)